

軍国の父でした

福岡県 今村 憲 司

『天に代りて不義を撃つ、忠勇無双の我が兵は』と連日のように、出征兵士を日の丸の小旗を振って見送る姿を、小さい時から私は見て来ました。

我が家からも長男は軍属で中支方面へ、二男は召集令状が来て陸軍へ、三男は昭和十五（一九四〇）年志願して海軍へと御国のため三人が軍属と軍隊に召されておりました。

昭和十二年七月七日、支那事変が勃発し、戦火は支那大陸全土に拡大し、若い人達は軍隊に召されて行きました。

私の町、福岡県山門郡瀬高町からも次々と出征され、私達も小学校時代から出征兵士を見送りに度々参加致しました。私は瀬高町太神一二九〇番、今村卯太郎の四男として大正十四（一九二五）年六月二十三日出生しました。

小学校は太神小学校に学び、高等科を添田尋常

高等小学校で学び、昭和十五年三月卒業しました。

卒業後、三井鉾山三池製作所渡瀬工場に就職しました。家業は農業で五反百姓でした。その上四男

五女を育てて両親は大変苦労したようです。当時

は「生めよ殖やせよ」が国策でしたから、どの家庭も子沢山でした。そして前述のように苦労して育てた長男は軍属に、次男は陸軍へ、三男は志願で海軍へと特に兵隊一家でした。

私の勤務しておりました三井鉾山三池製作所渡瀬工場も軍需工場として兵器に使用する部品の作製で毎日大変忙しい日々でした。特に私の職場は仕上げ作業場で、兵器の組立等をする大切な職場でした。軍需工場に勤務している若者達も次々と現役兵として、また召集兵として軍隊に召されて行かれました。

戦火いよいよ拡大し、昭和十六年十二月八日には太平洋戦争が勃発し、世相は戦時一色となりました。連日ラジオから流れる軍艦マーチ、連戦連

勝のニュースは、留守を護る家族や若者達に勇気

を与えてくれました。人々が口にする軍国歌謡は、血湧き肉踊る気持ちになり、若者の血気を逸はららせました。そして少年航空兵、少年通信兵募集の貼紙がやたら目につくようになりました。何かに志願したい気持ちで、働きながら一生懸命勉強しました。

昭和十八年に入ってから、こつそりと甲種予科練を受験しました。残念ながら体格試験で視力が一・〇に達せず、不合格となりました。三月になって、柳川小学校で佐世保鎮守府司令部による海軍志願兵の入団試験があることを聞き、両親には内密にして受験に行きました。

検査官に視力のことを申しますと、甲種予科練は無理だが、普通海軍兵なら〇・八ならいいだろう。毎夜遠い星空を眺めていたら少しは視力は良くなるから実行しなさいと、指導して下さいましたのでほっとしました。両親に相談したら反対されるだろうと思って無断で受験したのが少し気に

なりましたが、知らぬ振りをしておりました。

四月の末、仕事から帰りましたら、父が「お前は海軍を志願したのか」と聞きますので「ハイ」と答えますと「ほら合格の通知が来ているぞ」と、合格通知を渡しましたので「すみません」とお詫びして受取りました。

合格通知と入団通知を見ながら、合格した喜びと共に相談もせず受験したことに申し訳なく思いました。既に働き手三人を御国のために送り出し、残った男の働き手を失くすことの辛さ、しかも入団したなら生きて帰る保証のない軍隊へ、可愛い我が子を送る両親の苦しみを考えますと、申し訳ない、すみませんの言葉しかありませんでした。

当時は一人でも多く軍隊に送ることが武門の誉れと称賛される時代でしたから、困ったと思っても止めることが出来ない辛さは言葉では云い尽くせないことであつたろうと思いました。

父親は叱りもせず「好きで受験したのだから、人に負けないようにがんばれ」と云ってくれまし

た。鹿児島県出水海軍航空隊へ五月十日入団でした。父親は五十三歳、母は四十八歳でしたが、男四人を御国に捧げ、女の子五人を育てることは、働き盛りとは申せ大変な決意だったと思います。文句一つ云わず激励してくれる言葉に、我が父母ながら偉いと思いました。早速、職場にも事情を話し退職の手続きを取って頂きました。

私の家の事情を知る人達は「ご両親がよく許してくれたなあ、偉いぞ」と父母をほめてくれますので、私も嬉しく思いました。後に残る姉妹達に両親のことを宜しく頼むとお願いし、両親に不孝をお詫びして、五月十日家族、親戚の人々に見送られ出発しました。十九歳の今村憲司航空整備兵は、鹿児島県出水市の第二海軍航空隊に入団しました。当日入団したのは九州各県より、百六十人ぐらいの若者達でした。

広場に整列した入団者に対し、偉い方より「入団おめでとう。諸君は立派な海軍軍人として御国のために分骨碎身、尽忠報国の精神で努力してく

違いは許されない苛酷な教育でした。それが海軍魂を打ち込む方法で、自分自身もこれにより、身も心も大きく成長した感じでした。

十一月一日付で一等整備兵に進級し、大分県佐伯航空隊に転属を命ぜられました。佐伯航空隊は実戦部隊で、瀬戸内海から四国沖一帯を防備する部隊でした。九七式艦上攻撃機も十数機配備され、兵員も二千数百人ぐらいの大部隊と聞きました。実戦経験者もおられ、いつでも飛び立つことが出来るという部隊内の空気が今までの教育隊とは全然違う感じでした。

八月には北九州地区にB 29が飛来し爆撃したとか、八幡製鉄所が空爆を受けたとか、長崎地区にもB 29の空爆を受けたとか、出水の教育隊では聞けなかった情報が聞くともなく上司の会話の中に交じっておりまして。私達のような一兵卒には詳しいこしは分かりませんが、飛行機の飛び交う状況の中で緊迫した空気が察知されました。ここで一個分隊百六十人の編成が行われ、十二

れることを希望する」と、このような意味の歓迎の言葉があり、それぞれの班に分けられました。

兵舎内で軍服が支給され、それに着替えると身も心も海軍軍人になったような気になりました。大切にされたのはこの日一日でした。翌日から厳しい生活が始まりました。内務教育、言葉使いから体の動かし方、一つ一つ何も分からない初年兵に、指導下さる先輩の皆様も大変ですが、教わる方も大変でした。朝六時から八時の就寝まで、叱られ叩かれ忙しいこと、何で志願して来たかと涙を流すことも何回かありました。

出水航空隊は教育隊で実戦部隊ではないので、飛行機は有りませんから、解体した部分で指導教育が行われました。二等整備兵として基本的な教育が七月一杯行われ、さらに八月から十月一杯は教育隊で徹底的な教育訓練を受け、練習生を卒業しました。

その訓練の厳しさは云うまでもありません。地方の工場等では考えられない男と男の世界で、間

月一日、朝鮮の南方対馬海峡にある済州島の第二百一航空隊に転属を命ぜられました。佐伯から列車で佐世保軍港に、佐世保軍港から海防艦に乗船して済州島へ、佐世保港を朝に出てしばらく航行すると、大きな白波が立ち海防艦が揺れ出しました。酔う者も出ました。冬の玄界灘はしけるとは聞いておりましたが、正に話の通りでした。船室でごろごろ転がるような揺れでした。八時間ぐらい走って夕刻、目指す済州島に着きました。以外と大きな島でした。

この地での任務は、黄海、玄界の敵潜水艦と敵空軍機の監視と攻撃が目的でした。この頃は、南方戦線の我が軍は連合軍の反撃で全滅し、兵員が不足したため満州の関東軍を南方に派遣することとなりました。大連港からの輸送船は黄海を通り、東支那海から台湾沖のバシー海峡を通って南方へのコースをとりました。この輸送途中、アメリカの潜水艦で日本の輸送船は次々と撃沈されている時でしたから、早期発見し直ちに殲滅することは

我々に課せられた重大任務でした。そのため、電波探知機や対潜水艦哨戒機数機が配備されておりました。

気候は対馬暖流が流れておりましたので、九州本土とさほど変わらない気温でした。部隊から二キロぐらいの所に小さな街があり、郵便局、風俗店、軍のクラブもあって宿泊施設もありましたので、軍務が暇な時には交代で休暇を取り、町まで歩いて行き宿泊して帰りました。風俗店でも利用した者はみんな使用料は払って、楽しんでいたものです。

ある日、四十歳ぐらいの召集兵の方が、涙を流して泣いているのを見かけ、理由を聞きますと「歳をとっているので若い者のように暗記が出来ず、二十歳ぐらいの若い現役兵から殴られるといえます。自分の子供と同じ年の若僧から殴られるのが口惜しい」と二人の老兵が泣いている姿を見て、可哀想と思いました。洋服屋さんだと聞きました、世が世であれば小さいながらも一店の主人公

けるか分からないぞと、毎日一段と監視が強化されました。

電波探知器は設置されておりましたが、海面すれすれの低空で飛来して来る時は、発見し難い場合もあると聞いております。一度電波探知器で捕えて「すは空襲」と待ち構えましたら、日本陸軍の零戦だったと大笑いしたこともありました。「アメリカの潜水艦接近」との情報で、対潜哨戒機が飛び立ち、海面目がけて攻撃することも度々あり、帰還した飛行機の整備も多忙になりました。

昭和二十年四月、沖繩本島目がけて、アメリカ軍の空と海からの攻撃は激しくなったとの情報で、私達の基地からも一式攻撃機二機が沖繩支援に飛び立ちました。部隊一同の者が帽子を振って「しっかり頼むぞ」「無事で帰って来てくれ」と、声を張り上げ機影が見えなくなるまで見送りました。その光景は、初めて航空基地らしい光景でした。送る者、送られる者感激の一場面でした。同年兵だったと思います。

であるのに、召集令状がきたばかりに、家族を捨て海軍軍人として、毎日毎日若い者からこき使われ、挙げ句には覚えていない、態度が悪いと叩かれ、泣きたくもなるだろうと同情しました。その姿を見て以後私は叩くことはしませんでした。

食糧は不自由することはありませんでした、潜水艦を警戒して食糧を運ぶ船が遅延したために三日間食事は乾パンばかりで困ったこともありましたが、飛行機で空輸することになってからは、困ることはありませんでした。この頃は酒が不足する時ですから上陸用舟艇で運んで来る油とアルコールを待ち構え、酒の替わりにアルコールをそつと飲むこともありました。

海岸では、朝鮮の女性（海女）が採ったえびや貝類とタバコを交換することもありました。

昭和二十年に入ってから、B 29 の来襲によって内地では東京をはじめ主要都市が空爆を受けている模様、詳しいことは分からないがそれらしい情報を耳にし、濟州島の前線基地もいつ空襲を受

ついに来た米軍機、ロッキードの双胴機一機が、バリバリバリッと機銃掃射しながら飛来しました。ピュンピュンと頭を掠める機銃の弾丸、「そりゃ、入れ」と一目散に防空壕に逃げ込みました。初めての経験でしたが、それは凄く恐ろしいものでした。防空壕の中で無事を喜びました。

飛び去った後で格納庫近くの飛行機を点検しましたら、翼の一部に弾痕が残っておりました。燃料タンクの部分に命中せずによかったとほっとしました。二回空襲を受けましたが、二回とも人間に被害はありませんでした。こんな恐ろしい空襲を南方でも、南海の島々でも、沖繩でも、内地の各所でもと思いますと、戦争の恐ろしさにぞつとしました。

五月中旬に入って、日本本土への空襲と、沖繩本島への米軍の攻撃はますます激しくなっているらしいとの情報を耳にしました。我が基地からも度々潜水艦攻撃に飛び立ち、戦火を間近に感じました。

六月になって私も上等整備兵に進級はしましたが、新しい兵隊の補充がないので、相変わらず忙しい毎日でした。時折、瀬高の両親はどうしておられるのかなあ、兄達三人はどこでどうしているのかなあーと思いを馳せることもありました。

八月五日突如、一個分隊全員に秋田航空隊に転属を命ぜられました。この頃、北海道も東北地方の各飛行場も米軍のグラマン戦闘機の空襲が激化しているとの情報もありましたので「被害が大きいのかなあー、それでも秋田航空隊までどうして行くのかなあ」と皆不安でした。命令ですからばたばたと移動準備を終了し、迎えの海防艦に乗船しました。

余り時間もかからず着いた所は朝鮮の鎮海軍港でした。上陸して待機中に、広島に新型爆弾が投下されたことを聞かされました。原子爆弾で被害が大きかったことは復員してから知りました。

鎮海軍港から秋田に行くのに軍艦がないので川崎汽船の輸送船に乗船し釜山港に寄港しました。

労したのに何で敗けたのか！ 勝つことを信じて、家の困るのを知りながら志願して、毎日叱られ、叩かれ、歯をくいしばって頑張ってきたのにと思えますと、残念で残念でなりませんでした。

いや俺だけではないみんな同じ思いだろう、上司の方々はどんなに辛い思いであろうかと思えますと、知らず知らずの中に涙が流れました。

八月九日、ソ連軍が満州に攻め込んだことも知らされました。後で長崎への原爆投下と知りました。それを聞いた時、待てよ秋田航空隊の一個分隊全員移動を命ぜられたのは、ソ連空軍の日本本土空襲に備えての、北の護りのための移動ではなかったろうかと、私なりに考えもしました。

天皇陛下の玉音放送を聞いた人達は「戦争に負けた」と残念無念の涙が出たと、口々に話しておられました。私達も敗戦というショックで、何をすることも力が抜けてやる気がありませんでしたが、海軍軍人として連日一糸乱れぬ行動だけは続行されました。この日を境に釜山では様子が少し変わ

釜山港で物資を積み込んで舞鶴軍港への予定でしたが、八月十四日の夕方、明日十五日正午、重大発表があることを知らされました。重大発表とは何のことだろうと、みんな不審に思っておりました。

釜山駅の前に人が大勢集まっておって、その中に陸軍の兵隊さんもおりました。ラジオの声ははつきりしませんでした。が、神州は不滅だとか何とか云うのは聞こえましたが、なんのことやら分かりませんでした。

口々に戦争は負けたと云うので、私達は戦争に負けることなんか考えていませんでしたから、そりゃ「うそ」だろうと話し合っておりましたら、新聞の号外が出たと云うので、号外を見てびっくりしました。「ありやほんとに負けたとたい」と「これじゃ秋田には行かれんたい」「この先どんなになつとなあ」と思った時、初めて戦争に負けたと云う実感が湧いて来て、口惜しい涙が流れて来ました。敗戦！ 終戦！ みんながこんなに苦

り始めました。朝鮮の人達の私達を見る目が変わったことでした。

八月二十五日、私達は追われるように、川崎汽船に乗船して釜山港を出発して博多港に向かいました。もうアメリカの潜水艦の心配はなくなりましてので輸送船はすいすいと進みました。戦争は負けたが元気で帰れるという気持ちはみんな同じで、船の中でも故郷はどうなっているのかなと語る言葉は明るく笑い声さえ聞こえました。

翌朝、博多港に到着、直ちに上陸し、海の中道にある博多の海軍航空隊にトラックで向かいましたが、上陸して先ず驚いたことは、変わり果てた博多の街中と人の姿。何と無残な姿でありました。米軍の空襲を受けた博多の街は焼野原同然の憐れな姿でした。通る人の姿もみすばらしい服装で、力なく歩いておられるように思いました。

すぐ頭に浮んだのは、瀬高の街はどうなっているのだろうかと心配でした。すぐにでも飛んで行きたい気持ちでしたが、自由行動は許されません

ので、待て待て、すぐに帰れる、もうしばらくの辛抱だと、逸る気持ちを押さえ海軍航空隊の宿舎に向いました。

この航空隊からも多くの航空兵が第一線で活躍し、尊い命を御国に捧げた人もおられたのであろうと思えますと感慨無量でした。宿舎に入っても交わす話は、今後日本はどうなるのだろうか、家族はどうしているだろうか、働く仕事場はあるのだろうか、それぞれ心配しての話ばかりでした。一日二日はあつという間に過ぎました。

三十日になって部隊は解散、兵役解除の命令が下されました。嬉しいやら悲しいやら複雑な気持ちでした。わずか一年三カ月でしたが、叱られたり、叩かれたりした時は「こん畜生」と思った人達とも、いざ別れるとなるとなぜか別れづらくお世話になりました。「元気で頑張りましょう」と手を振りながら、涙がぼろぼろと流れました。

博多駅まではトラックで送って貰い、博多駅でそれぞれの故郷に向かって別れました。混雑する

れました。

四人の男を四人とも御国のために送ってくれた父と母、その父と母を助けてくれた五人の姉妹、ありがとうと感謝の涙が込み上げて来ました。後で同級生二人の戦死も耳にしました。

次男の兄が生死不明でまだ帰って来ておりませんでした。家族一同で無事を祈りました。長男の兄は軍属でしたが中支那より終戦前に佐世保に引揚げて来ていましたので、私より早く家に帰っておいりました。私の小学校時代に軍属で中支那に行きましたので、私の成長した姿を見て「立派になったなあ、よかったよかった」と喜んでくれました。祖国の再建は我々若人の力でと胸に秘め、両親を助け農業に専念しました。

心配しておりました次兄も、昭和二十一年二月に無事に帰って来ましたので、兄弟三人揃ったと父を始め家族一同喜び合いました。私も昭和二十一年七月に八幡製鉄所に就職することが出来ました。父は四人の男の子を軍属と軍隊に送り、五人

博多駅から熊本方面へ行く列車に乗り込みました。車内は人ばかりでいっぱいでした。乗車している人の顔も暗く、それでも陸戦隊姿の私を見られると、そつと頭を下げしてくれる人もおられて嬉しく思いました。

十九歳で志願して二十一歳になった私、何か大きく成長したように感じました。なつかしい我が家に帰る、みんなどうして迎えるかなあと胸をはずませます。

「瀬高、瀬高」という駅員の声に、急いで列車から飛び降りました。それから一目散で我が家めがけて走りしました。走ったも走った。「ただいまー」と飛び込んだ私の姿を見た家族は、ビックリしながらも、元氣な私を見て涙を流して喜んでくれました。

仏壇に向かって無事帰って来た報告をしている背中に、三男の兄が二月フィリピンで戦死したことを知らされました。「えっ戦死」という我が家からも戦死者が出たか、戦争の悲劇を改めて知らさ

の娘達を育てるため苦勞した疲労もあったのでしよう、昭和二十七年六十四歳で逝去しました。特に軍国の父であったと称えながらも親不孝を心からお詫びしました。

昭和四十四年三月、瀬高町の遺族会の皆様と共に靖国神社に参拝いたしました。初めて昇殿参拝をした時、軍隊時代に「死んだら靖国神社で会おう」と話し合っていたことを思い出し、元氣で帰って来た自分達は幸であったと思いますと共に、尊き命を捧げて日本を守って下さった靖国の英靈に、安らかにお眠り下さいと涙を流しながら手を合わせました。

「お父さん、お兄ちゃんのみ霊にもお詣りしたよ、お父さんは軍国の父でした」と手を合わせました。